

19 世紀のドイツに生まれた古典的ロマン派音楽家ヨハネス・ブラームス。幼少期よりピアノの才を現し、20 代の頃にはピアノ曲・オルガン曲を中心として作曲の才能も花開かせていく。

彼が 2 つの交響曲を世に送り出した頃、ドイツ領下にあったポーランドのブレスラウ大学より、名誉博士号授与の申し出が届く。この返礼として翌夏、『大学祝典序曲』は作曲された。ブラームス自身の 2 つの主題と 4 つのドイツ学生歌が次々と顔を出すこの曲は、非常に快活で「祝典的」な喜びに包まれている。

ブラームスの手によるハ短調の主題から曲は始まる。軽快なリズムが刻まれた後、クラリネットの悩ましげな歌声に呼び寄せられたヴィオラは、最初の学生歌の訪れを窺わせる旋律をロズさむ。ホルンとファゴットもこれに続くが、ここで初めの主題が再度繰り返されるとともに、ブラームスのもうひとつの主題が現れる。

ホルンが会場に静粛を呼びかけると、ハ長調で祝典が幕を開ける。金管楽器は第一の学生歌「我らは立派な学び舎を建てた」[譜例 1]を、荘厳に響かせる。曲が勢いを増すと冒頭の主題が陽気に顔を出し、第一ヴァイオリンや木管楽器が伸びやかに歌い継いでいく。

曲はホ長調へと移り、第二ヴァイオリンが第二の学生歌「祖国の父」[譜例 2]を誇り高く歌う。若者たちの祖国への愛に溢れた精神は木管楽器に次々に受け継がれ、やがて旋律はゆらめく三連符へと変化する。

三連符が消え突然四分の二拍子になると、第三の学生歌「新入生の歌」[譜例 3]が聞こえてくる。学生街にやってきた新入りたちをファゴットが真っ先にからかい始め、皆で手荒な歓迎をほど

こす。からからと笑うホルン。高いところからすまし顔で眺めるオーボエ。当時の学生の間では、新入生に酒を浴びせかける、喫煙を強要する、返答に困る質問をする、などといったことが慣例となっていた。大学という新しい世界への期待に胸をふくらませて来た新入生らは、予期せぬ”通過儀礼”を受けるのである。

ブラームス自身による 2 つの主題と 3 つのドイツ学生歌が出揃ったところで、曲は展開部に入る。ここまでの旋律がときには順序を変え、ときには省略されながら折り重なっていく。

展開部が巡り再び「新入生の歌」が戻ってくると、ついに第四の学生歌「ガウデアムス(喜びの歌)」[譜例 4]がコーダとして現れてくる。

Gaudeamus igitur,

いざ、楽しまん

Iuvenes dum sumus

我らの若き青春の時を

生き生きとした若者たちの大歓声は頂点に達し、祝典はハ長調の和音で締めくくられる。

(文責 Vn. 大貫かほり)

参考文献

『最新名曲解説全集 第 5 巻 管弦楽曲Ⅱ』

音楽之友社(1980)

『ドイツ学生歌の世界—その言語文化史的断面—』

ライムント・ラング 長友雅美 シンフォニア(1999)

『作曲家◎人と作品 ブラームス』

西原稔 音楽之友社(2006)

『ブラームスの音符たち』

池辺晋一郎 音楽之友社(2005)